

# アーレント 『活動的生』

## 第六章

上村 泰裕 (名古屋大学)

# 第六章 活動的生と近代

## 35 世界疎外の開始

---

- 近代の入口。アメリカの発見、宗教改革、望遠鏡の発明。p328
- 世俗内禁欲という世界内部的な世界疎外が資本主義を生む。p332
- 世界疎外的な土地収用が世界の安定性を根底から掘り崩した。p332
- 資本家も労働者も、世界に対する気遣いなしに経済活動。p335
- 福祉国家も、世界疎外の進行を止めることはできない。p338

# 第六章 活動的生と近代

## 36 アルキメデスの点の発見

---

- コペルニクスは観念。ガリレイの望遠鏡が確証を可能に。p341
- カトリック教会は、地動説の経験的確認は許容しなかった。p342
- ガリレイによる世界の脱魔術化。科学研究の文化的矛盾。p343
- 普遍宇宙を参照点とすることで科学は大地から疎外された。p347
- プラトンの数学は想像可能だが、近代数学は現象と無関係。p348

# 第六章 活動的生と近代

## 37 自然科学とは似て非なる、宇宙的な普遍科学

---

- 宇宙科学こそが、地球と自然の究極の秘密をあばき出せる。p354
- 哲学的な絶対性を連想させるが、概念による思考は困難に。p355
- 世界を変えたのは、デカルトではなくガリレイである。p357
- デカルトは出来事の意味を比類なき正確さで記録した。p357
- 近代科学の楽観主義は消失し、近代哲学と接近しつつある。p357

# 第六章 活動的生と近代

## 38 デカルトの懐疑

---

- デカルト以前の哲学は根源的驚嘆。以後は根源的懐疑。p358
- ガリレイの発見は感覚や理性を疑わせた。存在と現象。p360
- 見えるやわかるを疑う。ないかも／わからないかも。p361
- すべては夢／欺く神、から救われるための普遍的懐疑。p364
- 真理は存在しないとしても、疑っている私は存在する。p365

# 第六章 活動的生と近代

## 39 自己反省と、共通感覚の喪失

---

- デカルトの懐疑は、自己自身の確実性へと退却した。p366
- 私に見えていることは確実だが、現実の木とは限らない。p367
- 主観を共同世界と調整する人間の共通感覚、その退却。p370
- デカルトの理性は計算する理性、自分自身と遊ぶゲーム。p370
- 人間の認識能力の構造を参照点とした結果、世界を失った。p371

# 第六章 活動的生と近代

## 40 思考し認識する能力と、近代的世界像

---

- 相対性理論や量子力学は数式に書けるがわからない。p373
- 純粹数学と物理学の予定調和は偶然で、人間の幻かも。p373
- 理論と観測が一致しても、人間の認識能力の構造かも。p375
- 仮説的自然。人間は自己自身の牢獄に閉じ込められる。p376
- 感覚不可能なものは思考不可能。概念で捉えられない。p377

# 第六章 活動的生と近代

## 41 観照と行為の逆転

---

- 近代技術は、実践ではなく理論的関心の意図せざる副産物。p378
- ガリレイ以来、能動的行為(実験)が真理発見の方法に。p379
- 真理を直観するという意味での観想は消え去った。p380
- 哲学は科学の示す現実を後追いの的に理解し和解する努力に。p384
- その原因は、活動的生の優位獲得か、真理概念の消失か。p385



# 第六章 活動的生と近代

## 42 活動的生の内部での転倒と、制作する人の勝利

---

- 活動的生の復活に際して、行為ではなく制作が優位に。p386
- 実験は事象がいかに発生したかを再現。制作による認識。p387
- ホッブズは制度の制作。予期せざることを遮断して挫折。p391
- プラトンは、制作する職人のアイデアの比喻で哲学を語った。p397
- 近代の制作では、アイデアから制作プロセスに重点が移動。p398

# 第六章 活動的生と近代

## 43 制作する人の敗北と、幸福計算

---

- 制作する人は目的合理的に手段を工夫し生産性を最大化。p399
- マルクスでさえ制作モデル。労働に敗北したのはなぜか。p401
- プロセス重視で制作の目的という意味の源泉が奪われた。p402
- 功利主義は物ではなくプロセス全体の生産性向上をめざす。p403
- 幸福計算がめざしたのは人類の生命プロセスの保証。p406

# 第六章 活動的生と近代

## 44 最高善としての生命

---

- 制作の敗北が、労働する動物の勝利で終わったのはなぜか。p409
- キリスト教は世界ではなく個人の生命の不死性を説いた。p411
- 活動的生はどれも生命維持に必要。労働蔑視から解放。p413
- ガリレイの発見の時期が違っていたら歴史はどうなったか。p416
- 活動的生への転倒が生命絶対視の枠内で生じ、労働が勝利。p417

# 第六章 活動的生と近代

## 45 労働する動物の勝利

---

- 人間は信仰喪失で再び可死的になったが、この世も不確か。p417
- 唯一確かなのは人類の類的生命プロセスに参加する労働。p419
- 行為は制作と同一視され、ついには労働に。制作も労働に。p420
- 制作は芸術家、行為は科学者。科学者は意味を産み出せず。p422
- 孤独な思考が新たなつながりを準備する活動に浮上するか。p424

# コメント

---

- 世界の形成に寄与したい。思考は書物に定着しないと残らない。
- 福祉国家を論じなくてよいか。ウェブ夫妻の行為と制作の例。
- 奴隷なき時代の生産問題。私的領域に封じ込めることは不可能。
- 芸術や歴史をめぐる政治は差異に引き裂かれる。銅像の引き倒し。
- 歴史を語ることで、行為への出口を塞いでしまったのではないか。